

## ケルト語派 (Celtic)

ヨーロッパでは何か発掘されると、日本人が「縄文」というように、まずケルトの遺産ではと考える傾向があるようです。実際には紀元前八〇〇年前後からはつきりとその足跡が迫れますが、その後ローマに占領されるまでの間、中部ヨーロッパの広い地帯にケルト人がいました。最近ではイベリア（スペイン）、ガリア（フランス）などから碑文が多く出ています。大陸を追われて移住したアイerlandには紀元後五世紀くらいまで遡るオガム碑文があり、マンクス島、ウエールズの言葉もケルト語派に属します。

図10に紀元前一二〇〇年頃のヨーロッパの地図を引きました。「ライン川流域とスイスの骨壺葬地域」(Urnfelder-Kultur, B.C.1300/1200～800, 後期青銅器文化)がヨーロッパ考古学上重要なところでした。先に見たビスкупピンに大変よく似た集落跡が出ています。骨壺葬地域で、火葬の様子も再現できるようです(オーバーバイエレン(Poing))。しかし、印欧語族に属する何らかの部族拡張の一段階が示されている可能性があるのではないのでしょうか。それに続いて、ハルシュタット文化と一般に言われているケルトの文化がその上に重

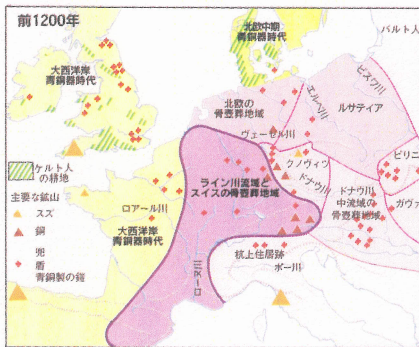


図10 ヨーロッパ紀元前1200年

H  
の消失  
による

なつてきて、紀元前のローマ帝国の版図になるまでにはヨーロッパ一帯に拡がり、考古資料によればブリテン島にまで達しています。紀元前後二世紀の間に帰せられるスペイン、南フランス、イタリア、スイスの碑文、各地に残るケルト起源の地名、古典文学中に見られる固有名詞や借用語など、大陸の散発的資料を除けば、今日まで生きているアイルランドの史料がケルト語派では一番重要です。

地名の中には、ミラノとかラインとか、音韻法則上ケルト語であることが解るものが多く見出されます。ミラノ (Milano) の古名はラテン語の文献に *Mediolanum* として知られます。 *medio* は「真ん中の、中央にある」、*lanum* はケルト語の特徴である語頭の *p* が消えたもので、ラテン語の *planum* 「平原」にあたります。つまり、「平原の真ん中にある」という意味です。印欧語の各言語に見られる複合語に、前肢に部分・場所を示す形容詞がくると、後ろの名詞の、その中の部分を指し示すというタイプがあり、これは「平原の真ん中にある町」という意味で、「中央にある平原」ではありません。アクロポリスは「ポリスの中の高い部分」です。

最近のケルトブームは、ヨーロッパ統合への動きとどこかで関係しているかも知れません。一般書としてビルクハーン (Bir Khan) が *Kelten* 「ケルト人」という本を二冊出しました (Wien 1997, 1999)。一冊は大変分厚くて文章だけ、もう一冊は美しい写真や図で満たされた重い本です。今までもケルトだと言われてきたものをかなり絞り込み、後の偽物とか、判断の誤りを指摘して、

インドのことばとヨーロッパのことば

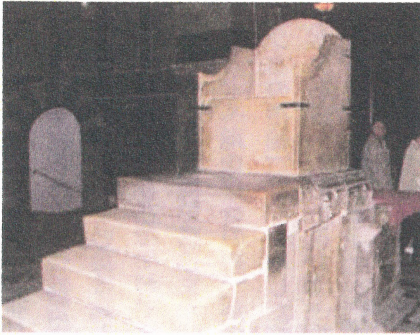


図11 カール大帝の玉座

その意味での進歩もあるとのこと。しかし、まだ贋作が含まれていると指摘する人もいます。

## ゲルマン語派 (Germanic)

西、北、東の三派に分類されるゲルマン語派ですが、この「民族」の「荒した」跡は、歴史で親しく習うところです。東ゲルマン語派に属するゴート、ヴァンダル、ブルグンド（ブルゴーニュ）、西ゲルマンのフランク族などの「移動」です。示唆的に思えますので、アーヘンにあるカール大帝

（在位七六八〜八一四）の玉座の写真を付しました（二〇世紀半ばの姿の由）。檜の無垢材を組み立てた質素な腰掛けを、木を模したかのような分厚い大理石で取り囲んで作られているそうです。金の飾りとか細かい装飾などが一切ない質実剛健さからは、物質文明に対する嫌悪感さえ伝わる気がします。

中世ドイツの帝国議会（Reichstag）は固定されず、その都度順番に開かれていましたが、私の見たレーゲンスブルクの議場は床も壁も木の板で張られ、飾りの一切ない、単なる板の間です。これらの中に、インド・ヨーロッパ語族、特に比較的遅くまでその体質を引きずっていたゲルマン語派の人たちの性格

が表わされているように思われます。これはまた、考古資料と突き合わせる際に困難の原因ともなっています。彼らは目立つ物質文明を自分自身では作らなかった、持っていなかったという点です。重要な役割を担っていた戦車も自分たちでは作っていなかったように思われます。インドでは、戦車職人は重要な存在ですが、自分たち（アーリヤ）の社会の外に置かれていました。技術や製作に對するむしろ蔑視を感じます。

『ニーベルンゲンの歌』からもそのような性格が伺えます。また、ヴァーグナーの楽劇『ニーベルンクの指輪』は、こうした精神を捉えているように思います。インド・ヨーロッパ語族との関連でヴァーグナーを語るのは一昔前なら危険思想だったでしょうが、ヴァーグナーの楽劇は、北ゲルマン語派の北欧神話『エッダ』とインドの『リグヴェーダ』の二つから多くを採っているものと推測されます。こんな玉座に座った人たちの観念を知るには、案外ヴァーグナーの楽劇を味わうことに意味があるように思えます。現在ではヴァーグナーの所有していた書庫が公開されており、実際に見た人から聞くと、古代インドの「ヴェーダ」についても新しい書物が出版される度に取り寄せていたことが伺えるそうです。改めて調査の価値があるように思います。ヴァーグナーという名が「車作り」を意味するのは何とも皮肉ですが。

このゴート族、ヴァンダル族、ブルグンド族、フランク族など、東および西ゲルマンの諸部族が大変な勢いで南下し、征服します。何が原因で、そして、何の為に移動したのかという疑問が起こ

インドのことばとヨーロッパのことば

ります。永続的な拠点をつくっていない人たちも結構あるようで、まるで通過することに意義があるという印象です。

ゴート族はゲルマン語派の中では最も重要な文献を残しています。紀元後四世紀にウルフィラ（「狼ちゃんじ」という人がギリシヤ語から直接訳した聖書が残っています。これがゲルマン語派最古の史料です。歴史の時間に東ゴート、西ゴートという概念を習いました。さらに、フン族の東方からの来襲がこれに絡みます。ゴート族は短命にして歴史の中に消えたのかと思いますと、黒海の北岸、クリミア半島から紀元後十六世紀のゴート語史料が出ています。つまり、ヨーロッパの大部分を荒し回った挙げ句、一〇〇〇年ほどの間、まだゴート族の村があったということになります。そうすると、彼らの人数、男女比の問題、遠征部隊と後続する一般部族民との関係、そうした問題が当然出てきます。

フランク族の場合には、五世紀から九世紀にかけて、比較的長く続いたフランク王国を打ち立てました。各地に展開したフランク族の一部は今日のドイツのフランケン地方に残っていると見ることができるとしようが、フランク王国を築いたフランク族は、おそらく殆ど男たちだけで移動し、現地の人口と比べると少人数で、やがて現地ガリアの言語つまりローマ帝国の言語の後裔に吸収されて消えてゆきます。名前は「フランス」という国に残り、人名にゲルマン系の名前が多いのもその名残りだと言われています。ちょうどミタンニ王国と同じような遠征部隊の存在が想定されます。

英語はもちろん、シュレスビック・ホルシュタインからデーナムルクへかけて住んでいたユート族、アンゲル族、ザクセン族が、紀元後五世紀頃、ブリテン島へ移り、ブリテン島を支配したことに遡ります。支配に至る具体的事情はなかなか解らないということですが、完成時には、だいたい今のブリテン島の南半分を主に三部族で分けて支配していたようです。それら三つの方言が混合しながら発展していったのが英語の歴史です。基本的な語彙については、今のハンブルク辺りのプラッツトドイツチュというものと共通点があります。

さらに、一六二〇年には大ブリテン島からメイフラワー号に乗って、「新大陸」を手に入れます。こうしたダイナミックなことが歴史上実際に起きました。バイキングで知られるノルマン族もゲルマンの一派です。ローマの言語から展開したロマンス語系のポルトガル、スペイン、さらに、フランス、イタリア、英語と同じ西ゲルマン語のオランダ語を操る人々の新世界への拡大もありました。世界史とその今の今を理解するには、新世界が印欧語化される過程について、より詳細で具体的な説明が必要です。

### バルト・スラヴ語派 (Balto-Slavic)

一般に、バルト語派とスラヴ語派とは共通時代が認められており、バルト・スラヴ語派と言います。その分岐は紀元前後に想定されます。スラヴ語派は紀元後十世紀近くまでほとんど方言差が

ない状態で推移しました。紀元後五世紀くらいまでは中部・南部ポーランドとその東側の比較的狭い地域に居住していたものと考えられています。十世紀以降次第に分化が顕在化して、東、南、西の三群に分類される今日の諸言語になりました。重要資料は九世紀後半にキリヤンによって訳された聖書の「古教会スラヴ語」です。十世紀末から十一世紀初めに遡る古写本がマケドニア語（スラヴ語派のそれで、ヴェネト語派のところでは触れたマケドニア語とは異なる）ないしブルガリア語の方言傾向を示す為、「古ブルガリア語」と呼ばれることもあります。

バルト語派には十六世紀以降の資料しかありません。リトアニア語、ラトヴィア語、そして、今は消滅した古プロイセン語です。現在のバルト三国に数えられるエストニアの言語はフィンランド語に近い、フィン・ウゴル語族の言語です。

## まとめ

インド・ヨーロッパ語族系統図を見てみると、色々な空想がかき立てられます。「各語派一回覇権説」という空想は初めに述べました。分岐の具合に注目すると、移動と拡大が盛んな時期に多くの方言が独立して文献資料を残し、歴史に登場します。これは当然の帰結かも知れません。このことは考古学や歴史学と関係してきます。例えば、すぐあとに触れるギムブタスが扱うヨーロッパに進出したインド・ヨーロッパ語族の人たちは西に移動したグループです。すると、図2の表のギリシャ

語派より下で分岐した語派は、その後、その人たちが順番に個性化し、定着していった段階ではないか。スラヴ語を見ますと、紀元後十世紀くらいまではほとんど方言差がない。それがこの後、同時に大きく分かれる。その背景には、おそらく移動・拡散があります。そういうことを繰り返してきていますから、古いヨーロッパの諸部族が、それぞれの言語（方言）は確立していたとしても、文化的には未だその個性を画然とは現さない、漠然とした共通の時代を持っていた可能性もあるかも知れません。ギリシャ語はその中でも早く個性を發揮したグループです。そう考えると、これはケルト人の遺跡、これはゲルマン人の遺跡と言えない部分があるのかも知れません。この夢想と、始めの方で申しましたインド・ヨーロッパの各語派はインド・ヨーロッパ祖語から殆ど同じ時代に別れたと仮定しないと歴史文法の細部の復元に支障がある、という言語学的な主張との間に、どう整合性をもたせるべきなのか、もう少し考えてみたいと思います。スラヴ語派の事情、じつとしてゐる間は方言の分岐が確認されないが、拡散と共に方言形が顕在化する、という辺りから説明できそうには思います。

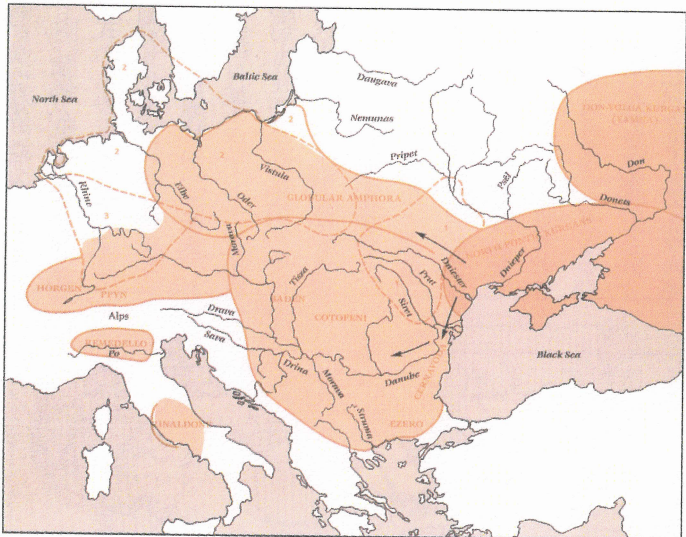
## 五 終わりに

インド・ヨーロッパ (印欧) 祖語を話す人々がいつどこにいたのか、という問いは昔から人々の



## インドのことばとヨーロッパのことば

興味を惹きつけました。様々な説が提出されましたが、厳密な証明には成功していません。最近ではギムブタスの「クルガン」文化が考古学的見地から有力視されています。Marija Gimbutas 女史はリトアニア生まれ、アメリカ合衆国でこの方面をリードした考古学者です（一九二四〜一九九四）。ドニエプル中下流域に馬の飼育と乗馬とにより、広範囲の移動を可能にした人々が確認され、彼らが印欧語族の核となったものと考えます。時期としては紀元前四五〇〇



KEY

- Yamna in the Don-Volga basin and North Pontic Kurgan groups
- Kurganized territories in Central Europe
- Limits of Kurgan territories north of the Black Sea and the Volga basin
- Kurgan Wave #2 influences from the North Pontic area
- Numbers mark the substratum culture groups:  
1. Cucuteni, 2. TRB, 3. Michelsberg

図12 ギムブタスのクルガン文化第三期（紀元前3500から3000頃）

年ほどにまで遡るとされています。「クルガン」の語自体はトルコ語で「墳墓、墳丘」を意味し、黒海の北側から東方のステップ地帯にみられる特定の様式のことを指しています。確認される馬、父権制、一夫一婦制の文化は注目し値します。ギムブタスは、この文化の担い手が黒海西岸に沿って下降し、ドニエプルとドニエストルの河口域を経てドナウ下流域に広がる第二期（紀元前四三〇〇～三五〇〇年頃、その末期にはブリテン島にまで影響が及ぶ）には、夫が死ぬと妻が同時に埋葬されるサテイーの存在があったことを指摘しています。この段階になると、防御施設を備えた都市・集落が急に現れますが、それをひきおこしたのが攻撃的なクルガン文化の担い手であったとしています。ここでは第三期（紀元前三五〇〇～三〇〇〇年頃）の勢力拡大の図を掲げておきます。東方へ進出した部分はトカラ語派、インド・イラン語派の人々へと展開しますが、今注目されているのが、トルクメニスタンを中心に発掘が進んでいる「バクトリア・マルギ

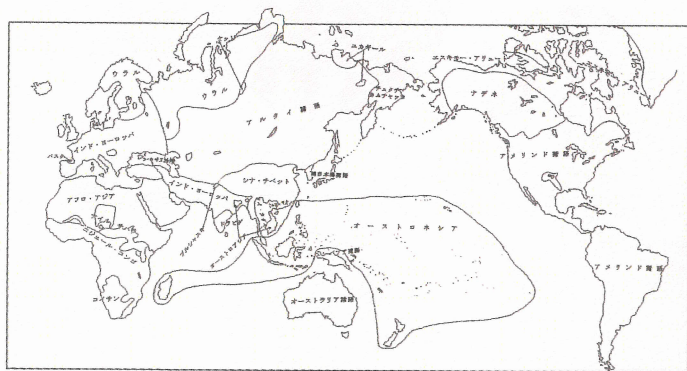


図13 世界言語分布図

インドのことばとヨーロッパのことば

「アナ文化複合」(BMAC)との遭遇です。進んだ文化と生産力をもっていたBMACの人々は巨大な城塞都市を造りました。インドイラン共通時代の人々がこの文化から移入した要素に重大なものが含まれていることが次第に明らかになりつつあります。より東方の、紀元前三〇〇〇年頃まで遡るロプノールの墳墓、「楼蘭の謎の美女」に代表される文化との関係も興味深い課題です。インドに入った後のアーリヤ人たちについての考古学的発見との摺り合わせは未だに空回りの状態ですが、少しずつ文献学、言語学の知見と考古学、人類学の知見とが照合されはじめる段階にさしかかっています。

最後に、インド・ヨーロッパ語族のことばが「世界史」へ向かって拡大してきたことを、図によって確認しておきましょう。図13は松本克己による、世界の言語のいわば出発点となった分布状況です。図14は、現在いずれかのインド・ヨーロッパ語を母国語または公用語の一つに

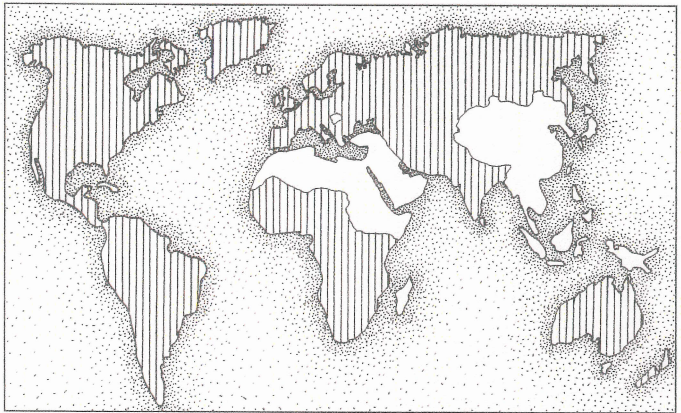


図14 インド・ヨーロッパ語の一つを第1言語または公用語の一つとする国々

している地域を示した図です。

【図版出典】

- 図1 辛島昇編『インド入門Ⅱドラヴィダの世界』東京大学出版会 一九九四年、四六五頁。
- 図3 Haidemarie Koch, Es kündigt Darios der König..., Mainz 1992, Taf. 2.
- 図4 岸本通夫『古代オリエンツ』河出書房、世界の歴史2、一九六八年、二五七頁。
- 図5 Manfred Mayrhofer, Die Indo-Arier im alten Vorderasien, Wiesbaden 1966, 巻末。
- 図6 Fritz Schacherneyr, Die Levante im Zeitalter der Wanderungen. Vom 13. bis zum 11. Jahrhundert v. Chr., Wien 1982, Abb. 4, 5: Die Seeschlacht in den Reliefs von Medinet Habu 4, 5<sup>o</sup> und 5<sup>o</sup> H. H. Nelson, Medinet Habu I, The Epigraphical Survey, 1930: invasion of the "sea people".
- 図7 Biskupin, ein polnisches Pompeji. Eine Ausstellung des Państwowe Muzeum Archeologiczne Warszawa 1985, p. 13, p. 7.
- 図8 Helmut Birkhan, Kelten. Bilder ihrer Kultur, Wien 1999, p.145, Seesiedlung (*crannóg*) auf den Britischen Inseln, Die rekonstruierte *crannóg* von Craegaunowen (Co. Clare).
- 図9 Ernst Probst, Deutschland in der Bronzezeit, München 1999, 47頁: Rekonstruktion der

(ヒルツ)

- älteren "Wasserburg" bei Bad Buchau am Federsee (Kreis Biberach) in Baden-Württemberg. Die Plattform unter dem Häusern ist ein Phantasieprodukt, das bisher nicht verifiziert werden konnte.
- 同頁37: Rekonstruierte "Burgmauer" mit Pforte aus der spätbronzezeitlichen Urnenfelder-Kultur (etwa 1300/1200 bis 800 v. Chr.) von der befestigten Höhenstedlung Heunischenberg auf dem Wolfsberg bei Gehülz (Kreis Kronach) in Bayern.
- 図10 ピエール・ヴィダル・ナケ編、樺山紘一監訳『世界歴史地図』三省堂 一九九五、四九頁。
- 図11 <http://www.hum.u-tokai.ac.jp/~nakagawa/journal02/page004.html> (東海大学文学部ヨーロッパ文明学科中川研究室、「二〇〇五年八月、ベネルクス・北フランス滞在記」)より。
- 図12 Marija Gimbutas, *The Civilization of the Goddess*, New York 1991, p. 368.
- 図13 松本克己「日本語の系統」、アレクサンダー・ボビン、長田俊樹共編『日本語系統論の現在』、日文研叢書31、国際日本文化研究センター 二〇〇三、一一六頁。
- 図14 J. P. Mallory, *In Search of the Indo-Europeans*, London 1989, p. 264.